

## タイ研修に参加して思ったこと

福井県立武生東高等学校 一年 吉岡 野絵

私たちはなぜ、また裕福さを追求しているのだろう。日本より、もっともっと苦しんでいる国があるというのに。また、なぜ人を無闇にも殺してしまうのだろう。明日、生きたくても生きられない人たちがいるというのに。タイへ行つて、深く考えさせられることがたくさんあった。

今年の八月の初めに、私は初めて海外研修に参加した。行く先は、タイ・バンコク。ヨーロッパなどの美しい町並みとは違う、アジアの中でも貧富の差が激しい国だ。カルチャーショックを受けたと先輩方からも聞かされていたが、果たし

てそれほど貧しいものなのか。それを確かめるため、また、異文化を体験するためにこの研修に参加した。

タイに到着し、まず、バンコクの意外な景色に圧倒された。たくさんの高層ビルや車が目に飛び込んできたからだ。「こんなにも都会なのか。」と思うほど、東京とほぼ同じ景色だった。このときはまだ、それほどの差は感じられなかったが、ビルの下を見てみると、古びたコンクリートの家がちらほらあった。しかし、それでもまだ裕福さが感じられる家だった。

村に着いたとき、「え？ここ、タイ？」と思うほど、さっき見た景色とは打って変わっていた。見渡す限り緑が生い茂っていたのだ。私はそのときから、先輩がカルチャーショックを受けたわけがだんだんわかってきた。私はそこで初のホームステイを体験したのだが、思っていた以上に悲惨だった。特にひどかったのがお風呂だ。お風呂と言っても、湯船につかれるわけではない。雨水を貯めた浴槽から、容器でその冷たい水をすくって頭からかぶるだけ。初日は抵抗を感じたが、二日目には慣れていた。それにしても、水が飲めないのはかなり不便で、食事のときは毎回大量のペットボトルが用意された。日本だと、蛇口をひねればすぐに出てくる水。その水が、彼らは自由に使うことができない。それを知って、

日本はものすごく裕福なんだと感じた。でも、それを知ったからと言って、そう簡単に井戸を掘って水を確保することはできない。だから、私はボランティア活動をしたい。もちろん、生活に苦しんでいる人たちのためだけれど、自分のためにも、ボランティアをしたい。だから、「してあげている」という考えを捨て、「させて頂いている」という気持ちを忘れないでいたい。

タイへ行つて、素晴らしいと思つたことがある。それは、笑顔だ。大人も子どもも皆、笑顔で快く接してくれた。日本語はもちろん、英語も通じないこの異国の地で、ジェスチャーと数少ないタイ語だけでなんとか六日間を過ごした。相手が言いたいことを理解するときに、相手の心を知ろうという思いが強ければ、言葉なんていらななんだと思つた。

この研修を通して、感じたことが二つある。一つは、水の大切さ。普段、何気なく使ってしまったっている大量の水。お風呂のときなんて、何リットルの水を使っているのかわからない。もし、水が自由に使えなくなったら、どうやって生活していけばいいのかわからなくなる。自由に使えるからこそ、使い過ぎに気を配るべきだと思う。

二つは、笑顔の素晴らしさ。帰国して、日本人の顔を見たとき、なんて険しい

表情をしているんだろうと思った。仕事などに追い込まれて笑顔のない生活を送っているんだろうなと思った。そんな人たちに、タイの人たちの笑顔を見てほしい。私たちより何十倍も何百倍も輝いている笑顔を。

私一人ではできないことがある。けれど、同じ気持ちを持った人たちが集まれば、不可能を可能にすることができるかもしれない。まずは、募金活動などの小さいことから始めていきたい。